

# 第四回 諸橋轍次記念 漢字文化理解力検定

## 解答・解説

### 【問題一】(小計44点)

問1 【読み書き】①=携 ②=のどか ③=泰然 ④=かつこう

⑤=手折 ⑥=一目散 ⑦=ひん ⑧=膝頭 (各2点)

問2 【漢詩人】ア (2点)

問3 【旧字体】ウ (2点)

問4 【熟語の意味】イ (2点)

問5 【故事成語】ウ (2点)

問6 【複数の音読み】本望、所望、懇望など (2点)

問7 【ひらがなの起源】エ (2点)

問8 【同訓異字】エ (2点)

問9 【同音類義】悠長 (2点)

問10 【漢字の意味】ア (2点)

問11 【部首】ウ (2点)

問12 【故事成語】イ (2点)

問13 【外来語の当て字】イ (2点)

問14 【四字熟語】エ (2点)

問15 【漢文学】イ (2点)

■解説 文化勲章を受章した学者というと生真面目な人だと思うかもしれない。③「泰然」は、どつしりと落ち着いた。「安泰」。④「恰好」は、ちょうどよい。「恰」の音読みは「こう」で、「かつ」はその音便。⑤「手折る」では「手」を「た」と読むことに注意。⑥「一目散」は、脇目もふらずに急ぐようす。⑦「瀕する」は、すぐ近くまで迫る。「瀕死」。⑧「膝頭」の「膝」は、音読み「しつ」。「膝蓋骨」。

問2 陶淵明 (陶潛) は東晉の詩人。「飲酒」詩の「菊を采る東籬の下、悠然として南山を見る」の句で有名。イは唐の詩人李白、ウは唐の詩人白居易 (白居易)、エは北宋の詩人蘇軾の説明。

問3 ア「擅」は音読み「せん」、訓読み「ほしいまま」。イ「撻」は音読み「たん」、提げる、触れるなどの意。エ「擇」は「択」の旧字体。

問4 正解のイ「逍遙」の読み方は「じょうよう」。ア「逡巡」はしりごみすること、ウ「邂逅」はめぐり合うこと、エ「邁進」は雄々しく進むこと。

問5 管仲は、年を取った馬であれば故国への道を知っているであろうと考えて、老馬を先導とした。

問6 「望」を「ぼう」と音読みするのは漢音、「もう」は吳音。この違いは意味の違いには関係しない。

問7 「み」の元になつた形は「𠀤」で、これは「美」の崩し字の一種だと考えられている。

問8 選択肢はいずれも「もと」と訓読みする漢字。原文はウ「基」で基礎の意だが、ア「下」は下敷きとするもの、イ「元」は生み出する元になるものという意味で空欄Aに入れても文意が通じる。エ「許」の訓読み「もと」は「手許」「國許」「親許」などでしか使われないの音読みで「ちようかん」とも読めるが、「ちようかんな」とは言わな

で、ここには適さない。

問9 「暢」は、音読み「ちよう」。伸びやかの意。「悠暢」も「悠長」も、のんびりしていること。

問10 イ「睞」は目をみはる、ウ「睂」はちらつと見る、エ「睇」はにらむの意。

問11 「西（酉）」は、「かなめのかしら」と呼ばれる部首。ア「票」の部首は「示」、イ「栗」の部首は「木」、エ「栗」の部首は「米」。

ウ「要」はもとは「腰」を意味する漢字で、部首は「女」ではない。

問12 「隴を得て蜀を望む」は、隴という地方を領地としたある武将が、さらに蜀という地方も手に入れたいと欲を起こしたという、『後漢書』に由来する故事成語。ア「二兔を追う者…」は、二つのものを手に入れようとすると、一つも手に入らない結果になりがちなこと。

ウ「鹿を追う者…」は、欲に取り付かれてまわりが見えなくなること。エ「小人閑居して…」は、つまらない人物は、時間をもてあますと悪さをしがちであること。

問13 「奈落」は、梵語（サンスクリット）で地獄を意味することばに対する当て字。ア「合羽」（かつぱ）はポルトガル語に、ウ「葡萄」（ぶどう）はギリシャ語または中央アジアの言語に、エ「燐寸」（まつち）は英語に由来する。

問14 原文はア「絶体絶命」だが、イ「自業自得」、ウ「無為無策」を入れても意味は通じる。エ「徹頭徹尾」は最初から最後までの意。

問15 このとき、函谷関の番人に請われて老子が書き残した書物が、現在まで伝わる『老子』だという。ア「孔子」は函谷関より西へは旅していないし、ウ「釈迦」は中国には来ていない。エ「孟嘗君」は、追つ手から逃れて函谷関の外へ出た「鶏鳴狗盜」の故事で有名。

（円満字）

## 【問題II】（小計20点）

問1 【誤字訂正】①||昇→衝 ②||起→岐 ③||退→怠 ④||位→衣  
⑤||移→異（各2点）

問2 【人物】ウ→オ→エ→イ→ア（完答6点）

問3 【書籍と人物】ア・オ（順不同 各2点）

■解説 問1 ①「意氣衝天」は「意氣衝<sup>フツ</sup>天（意氣 天を衝く）」と訓読できる。②逃げた羊を追い求めたが、枝道（岐）が多くて見失ったという『列子』の故事から。③「怠」は、日本語独自の意味で、「だるい」の意。④「一衣帶水」は、一筋の帯のような狭い川や海峡のこと。「衣帶」は、帯の意。⑤「異動」は、地位や勤務などが変わること。「移動」は、動いて位置が変わること。

問2 ア 伊藤仁斎（一六二七—一七〇五）江戸時代初期。イ 王陽明（一四七二—一五二八）明時代。ウ 孔丘（孔子）（BC五五一？—BC四七九）春秋時代。エ 朱熹（朱子）（一一三〇—一二〇〇）南宋時代。オ 荀況（荀子）（BC三一三？—BC二三一八）戦国時代。

問3 ア「一狐裘三十年」は、春秋時代、斉の晏子のエピソード。晏子は宰相の地位にありながら、非常な儉約家で、一枚の狐裘（きつねのかわぎぬも）を三十年も着通したという。イ「二霸」の「霸」は、諸侯の長の意。春秋時代、齊の桓公と晋の文公（名は重耳<sup>じゅうじ</sup>）をいう。なお、「五霸」は、この二人に加えて、楚の莊公<sup>そうこう</sup>、宋の襄公<sup>そうじょうこう</sup>、秦の穆公<sup>ぼくこう</sup>をいうが、異説もある。ウ「三省」は、一日に何度もわが身を反省すること。曾参（曾子）は孔子の門人で、孔子の教えを伝えるのに最も功があつた一人。『論語』に「曾子曰はく、『吾 日に吾が身を三省す。……』とある。エ「四庫全書」は、清の乾隆帝の勅命によつて国内の書籍を集めた叢書。「四庫」は、朝廷の蔵書を經・史・子・集の四部に分類して納めておく書庫のこと。オ「五柳先生伝」は、東晋の陶淵明（陶潛）

の自伝的文章。陶潛は自家の門前に植えた五本の柳にちなんで、自ら五柳先生と称した。カ「六書」は、漢字の成り立ちと用法についての六種の区別。一般には、象形・指事・会意・形声・転注・仮借をいう。漢字の本来の意味を導き出すために用いられた原理で、後漢の許慎の『説文解字』に始まる。キ「七歩の才」は、三国時代、魏の曹植のエピソード。兄の曹丕に「七歩あるく間に詩を作れ。できなければ処刑する。」と命じられ、その声の終わらないうちに詩を作つたという。『世說新語』の故事から、詩才に優れ、詩作の早いことをいう。

(塚田)

### 【問題III】(小計15点)

問1【国字】(1) = d (3点) (2) = びょう (2点)

問2【国字】そり (3点)

問3【国字】磨 (2点)

問4【国訓】(1) = あゆ (3点) (2) = ねん (でん) (2点)

### 【問題IV】(小計15点)

問1【小学書】オ (3点)

問2【書体】小篆(篆書) (3点)

問3【字の分化】吊 (3点)

問4【発音を用いた借字法】仮借(通假) (3点)

問5【日本漢字音の入声】オ (3点)

準に採用されたため、インターネット上では普通名詞の「そり」として、これらの国字が使われることが増えてきました。

問3 男性の人名に使われる「まろ」は、「麻呂」「万呂」などと万葉仮名で表記されることがありました。「麻呂」は奈良時代に次第に接合が進み、「磨」という合字が生じました。平安時代になると「まる」という名が増えて、例えば「柿本人麻呂」も「人磨」のほか「人丸」と書かれることが増えていきます。

問4 魚の「あゆ」は、奈良時代から「鮎」と書かれています。中国ではナマズを意味するネン(デン)という音の漢字で、日本でも「瓢鮎図」などと使われてきました。日本では、神功皇后がアユを釣つて戦況を占つたという故事により、「あゆ」という国訓ができたと考えられています。

(笛原)

■解説 問1 「鉢」は、画鉢、鉢螺のよう今でも使われている国字です。武具などをつなぎ留める金属製の道具「びょう」を表すために、中世から様々な工夫がなされていましたが、「金」偏に、発音を表す「兵」を合わせて作られたこの字が一般に定着し、工具や日用の道具などとしても使われるようになつたものです。

問2 「そり」には漢字に「櫓」があります。しかし、江戸時代により分かりやすい字を求め、「雪車」「雪舟」といった熟字訓の表記を踏まえ、雪の中の舟ということで作られたものと考えられます。なお、「轡」はこの「轡」の異体字といえ、秋田や新潟(読みは「ずり」)などの地名に残っています。ともに一九七八年にJIS漢字の第2水

■解説 問1 オ『爾雅』は前漢・平帝(BC一年～AC五年在位)の頃までに成った辞書(訓詁学の書)。ア『佩文韻府』(張玉書等奉勅撰、一七一年)は詩作のための用例集。「類書」に分類される。イ『説文解字』(後漢・許慎、一〇〇年)は字書(文字学の書)。ウ『玉篇』は五四三年に顧野王が編纂した字書(文字学の書)。原本は散逸し、現存する完本は節略本としての性格を持つ『篆隸万象名義』(积・空

海、九世紀前）と、『大広益会玉篇』（一〇一三年）。エ『広韻』は正式名称『大宋重修廣韻』。一〇〇八年に陳彭年により編纂された韻書

（音韻学の書）。カ『方言』は正式名称『輶軒使者絶代語釈別国方言』。前漢・揚雄の撰で、中国初の方言語彙集（訓詁学の書）。

問2 秦の始皇帝は全国を統一後、文字を統一する政策を行つた。始皇帝に命じられた丞相の李斯は、秦地方で使われていた篆書、籀文（大篆）をもとに「小篆」と呼ばれる書体を創り出し、基準としたとされる。

問3 「弔（つるす）」はもともと「弔（とむらう）」の異体字で、『康熙字典』は「弔」の俗字とする。現代日本では意味によつて両字を書き分けている。

問4 「女」字は、ここでは「汝」字の代わりに使われている。「女」と「汝」とは発音が近く、古典文献の中では「汝」の代わりに「女」字が多く用いられている。このような発音の類似をもとにした借字法を仮借と呼ぶ。ここでは「汝」という本字（その語を表すために作られた字）があるが、本字がそもそも存在しない場合もある。これと区別して、本字がある場合の仮借を通仮と呼ぶことがある。

問5 字音仮名遣いで示される日本漢字音にはよく入声が保存されており、江戸時代以来、熟語語尾が「-フ、-ツ、-ク、-チ、-キ」で終わる字が入声字であると説明されてきた（太宰春台『和讀要領』「倭音正誤」など）。ア「拓タク（k）」、イ「日ヂツ（ニチ）（t）」、ウ「立リフ（p）」、エ「別ベツ（t）」、カ「俗ゾク（k）」でいづれも「フツクチキ」で終わる漢字音。オ「流リウ」は平声。ウは、字音仮名遣いで「立リフ」と書くよう、本来-pで終わる発音の字だが、特定の熟語での使用を除き、日本では慣用的に「リツ」と読まれる。

## 【問題V】（小計6点）

問1 【諸橋轍次のエピソード】ウ （3点）

問2 【中国留学を支えた人びと】犬養毅（犬養木堂）（3点）

■解説 問1 母親シヅは、明治四一年、轍次が初めて教師として群馬県師範学校に赴任した矢先に亡くなつてゐる。昭和二四年、当時諸橋家にあつた「遠人村舎」に寄寓してゐた三男諸橋晋六（後年、三菱商事社長・会長を歴任）の学友、庄司永健は、轍次の孫たちとの「西遊記」遊びのあだ名で「銀角」と呼ばれ、家族同然に過ごしてゐた。あるとき、実家から芍薬数株を持ち帰り、邸内の庭に植えた。それを見た轍次が幼い時に母が芍薬を庭に植えたことを思い出し、親の生前に孝養を尽くしえなかつた悲しみの思いをのせた「芍薬」の詩を作つてゐる。また轍次は、役者を目指す庄司に、「こういう勢いで芝居をやんなさい」と「老来猶有少年夢 長剣衝波斬海鯨」（ろうらいなおありしようねんのゆめ ちようけんなんみをついてうみのくじらをきる）の詩を贈り激励した。庄司はこれを座右の銘としていた。

問2 清朝末期から中華民国への動乱期、中国に留学する者などない中で、漢学の衰退を憂いる人物が数多くいた。轍次の中国留学を支援する人びとの中には、『論語と算盤』を口述し、「道徳経済合一」を唱えて「日本資本主義の父」と称された渋沢栄一や、「せめて儒林伝中のととなれ」との激励の書簡を寄せてくれた、後の首相にして、「五・一五事件」で射殺された犬養毅（号は木堂）がいた。

（諸橋轍次記念館）

（田中）